Japan Epilepsy Society

Ⅱ－C－5　Spike—Wave Stupor —多様性の状態像を示した一例

香川医科大学精神神経科　○高橋　茂
細川　清
愛媛県立今治病院・精神科　中川　学
岡山大学医学部神経精神科　大月　三郎

Spike-Wave Stuporに関する報告は、これまでに少なからざる数に達している。そして、その臨床表出と脳波との相関に関しても、或る程度まとめられ整理されてきている。今回、さらに一例を報告するが、それは本例が、この種の症例が持つ特徴と問題点のほとんど全てを包含すると考えられるからである。

症例は昭和41年生まれの女性。本例の特徴は、以下の如くまとめられる。1.定型欠神発作で発症。2.全身ケイレン発作を合併する。3. Spike-Wave Stuporの発症は、通常の発作より3年遅れ、それ以後本来の発作は一際認められていない。4.脳波上、キョク徐波複合は極期において3c/s前後で定型波に近かった。5.臨床像において極期にはminor epileptic status (Brett) を思わせる種々の臨床症状がみとめられた。すなわち、ミオクローヌス様運動、失立、躯幹の動揺などの偽神経学的徴候、一方精神症状は、言語動作緩徐、表情は変化に乏しく弛緩した痴ホウ様を示し、常同、保続傾向、情緒不安定、猜疑的傾向がみとめられた。6.極期における睡眠脳波では、睡眠段階を明確に判定することは困難で、脳波以外のパラメーターにも一定の傾向を見出せなかった。キョク徐波複合は減少したが、消失しなかった。7.治療的に難治であり、発症以後現在まで二年有余に亘るにもかかわらず、軽度の改善はみられるが、まとまった寛解期といえるものがない。時に被害的思考も出現するが、痴ホウ化の進行はない。8.現在点の脳波は極期のそれと異なり、キョク徐波複合の規則性がなくなっている。

本症例に関し、spike-wave formationについての病態生理に若干の考察を加えたい。

Ⅱ－C－6　欠神発作の臨床的脳波学的検討

慶応義塾大学医学部小児科
横須賀共済病院小児科*
前沢眞理子，関　亨，山脇英範，鈴木伸幸，木実谷哲史，山田哲也，立花泰夫，清水　晃
広瀬　誠*

【目的】欠神発作の病態生理学的背景を解明する目的で，臨床，脳波上より厳密に規定した，欠神発作84例につき臨床特性，臨床経過，脳波所見の経年的変容，ＣＴ所見などを検討した。【対象・方法】対象は，1964年１月から1984年６月までに本院外来を受診した欠神発作84例（男子35例，女子49例）である。本症の診断基準は，特有な臨床発作を頻回に認め，その際，脳波上，全般性律動性３Ｃ/Ｓ棘徐波結合群を認めるものとした。【結果】１）臨床所見①けいれんの家族歴１７(２１％）②熱性けいれんの既往歴33（３９％）③周産期異常，外傷の既往歴２７(３２％)④Focal spike 陽性例３３(３９％)⑤初発時臨床病型　けいれんの既往なくAbsenceで発症した症例をＩ型としＦc or GTCの既往がありAbsenceを発症した症例をⅡとした。Ｉ型は50例（６０％），Ⅱ型は34例（４０％）であった。平均初発年齢は，Ｉ型では7.0±2.3才，　Ⅱ型では6.7 ±2.1才，総合すると6.9±2.2才であった。⑥初診後の発作型の変容１３(１６％）⑦知能障害４（５％）２）脳波所見　Focal spikeは，Ｃ－Ｐ－Ｏ areaに多く認められた。加令と共に発作性異常波は消失する傾向が認められ，最終脳波記録における間歇期発作波をみると特に５年以上経過観察しえた48例では，５例に３Ｃ/Ｓを含め全般性棘徐波結合群の出現を，また３例に局在性異常波の出現を認めた。さらに同胞例の脳波を施行しえた５例についてHereditary epileptic predispositionに関する検討を加えた。３）ＣＴ所見　２７例で施行され２例（7.4％）が異常を呈した。【結語】欠神発作８４例につき，臨床特性，臨床経過，ＣＴ所見および各症例につき脳波を経時的に施行し比較，検討した。

NII-Electronic Library Service